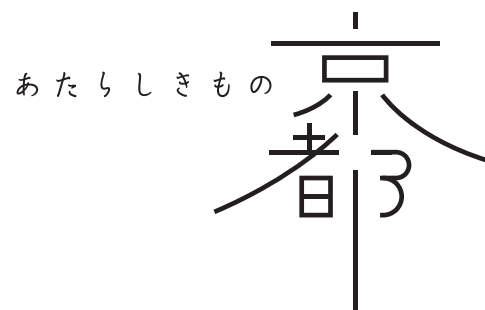


あたらしきもの

京都





「あたらしきもの京都」は、京都の事業者が日本全国に向けて新たに発信するモノ作りプロジェクトです。

長い歴史と進取の精神に富む京都の伝統工芸や地場産業が持つ優れた素材と技術を、現代のデザインによってさらに洗練させました。

これらは、日々の生活に潤いと輝きをもたらす暮らしの道具ばかりです。ファッション関連やテーブルウェア、文具、家具など、アイテムは多彩。しかもどれをとって見ても、そこには見慣れた京都のイメージを超える新しい表情と普遍の価値が宿っています。

“伝統の解放”に“破壊的創造”——。

そんな挑戦に満ちた「あたらしきもの京都」は、暮らしに喜びと感動をもたらし、日本の生活文化の進化に貢献します。

目次

4 …… 京都美京	
6 …… 夢み屋	
8 …… 京都樹脂	
10 …… 丸進	
12 …… 加地金欄	
14 …… 宇野商店	
16 …… 和紙来歩	
18 …… 鳥居	
20 …… 尚雅堂	
	22 …… 弥栄
	24 …… 田中ケース
	26 …… 熊谷聡商店
	28 …… 江村商店
	30 …… 井助商店
	32 …… 晋六
	34 …… 丸二
	36 …… 宮崎木材工業
	38 …… 土田人形

アドバイザーチーム

デザイナー	みやけかずしげ 森田明奈
セールスアドバイザー	人見幾生 高橋大輔
コミュニケーションアドバイザー	下川一哉
コーディネーター	西堀耕太郎

あたらしきもの京都カタログ
2016年2月1日発行
編集・文 下川一哉、杉江あこ
取材写真 金子直樹
商品写真 福尾行洋
発行 京都商工会議所

DIGITAL3D Shibori デジタル3D絞

京都美京



素 材: シルク
サイズ: W85cm×H180cm

未来的挑戦で伝統技術を“解き放つ”

1959年に「松岡絞り」の暖簾を掲げた京都美京。現在は若き伝統工芸士の松岡輝一が、京鹿の子絞の製造とプロデュースを行っている。

「京鹿の子絞の技術を着物以外の商品にも応用して市場を広げ、和装業界の活性化を図りたい」という思いから、松岡が新たに挑んだのは、



専務取締役 松岡輝一

〒604-8863 京都市中京区壬生中川町2-3
Tel : 075-812-7777
Fax : 075-841-8322
Mail : k.bikyo@jeans.ocn.ne.jp
<http://www.ma2sen.co.jp/bikyo>

KIIZOMĒ



「デジタル3D絞(商標登録出願中)」だ。これは京鹿の子絞の技術の1つである板締め絞染の道具(型)をコンピューターの3Dソフトでデザインし、3Dプリンターで出力するというものだ。道具作りの職人が減り、3Dプリンターはその代わりとして注目を集める新技術ではあったが、京鹿の子絞業界で3Dプリンターを

実際に活用したのは、今のところ松岡ただ1人である。

「どうせ挑戦するならもう一步進んだことを」と、アナログにはできないデジタルならではの複雑な形に挑み、試行錯誤を繰り返した。その甲斐あり、柔らかな立体感を持った、新しい風合いの京鹿の子絞を完成させた。

ITOKICHI

夢み屋



古い物から生まれる“新鮮な感性”

素 材: 綿・シルク
サイズ: W15cm×D3cm×H3.5cm

まだ「和雑貨」という言葉さえなかった1975年当時、着物生地で作ったリボンがヒット商品となり、創業に至った夢み屋。主にちりめん生地を使い、温もりのあるインテリア装飾品の企画、製造、販売を行っている。

創業者の飯田景子は元々、アパレルのファッションデザイナー。結婚を機に



代表取締役 飯田景子

〒612-8009 京都市伏見区桃山町見附町20
Tel : 075-622-6900
Fax : 075-622-6904
Mail : info@yumemiya.co.jp
<http://www.yumemiya.co.jp>



京都に移り住み、アンティークの着物と出合った。「モダンな柄が新鮮だった」と今も感動を忘れない。以来、明治から昭和初期までの着物を収集し続け、数百枚を数えるまでに至った。

これらアンティークの着物を生かし、飯田はメンズのファッション小物の開発に初めて挑んだ。銘仙など張りのある

織物で、ボウタイ(蝶ネクタイ)を製作。タイは布目に対して斜めに裁つのが基本だ。しかも劣化部分を避けながら良い柄行きを探すと、1枚の着物から3～4点しか生地を取れないと言う。

そんな希少なボウタイには独特の趣があり、おしゃれを楽しむ男性に向けて、雅な着物生地の魅力を伝える。

西陣織アクリルバングル

京都樹脂



先端技術で魅力をより一層“際立たせる”

素 材：樹脂・シルク
サイズ：W13cm×D13cm×H1cm

初代はかんざしや帯留などを作る鼈甲細工職人で、1941年に開業。その腕が買われて、太平洋戦争中はアクリルの加工技術開発に携わり、航空機の風防などを製造し成長した。高度経済成長期には総合プラスチック加工へと事業を広げた後、現在は商業施設の什器製造や施工を主な事業としている。



代表取締役社長 末松靖子

〒600-8887 京都市下京区西七条名倉町 29
Tel : 075-312-3741
Fax : 075-311-8481
Mail : k14@oregano.ocn.ne.jp
<http://www.k14co.com>

 京都樹脂株式会社
総合ディスプレイ



チャレンジ精神旺盛な先代が開発したのが、アクリル板に西陣織を封じ込めたオリジナル素材だ。これは板と板の間に西陣織を挟み込んでいるだけではない。独自の技術によって西陣織を樹脂化し、アクリル板と一体化させているため、曲げたり穴を開けたりする加工が可能に。さらに西陣織の色がくっきりと鮮

やかに映え、織り目が立体的に浮かび上がって見えるのが特徴だ。

先代の思いを汲み、「このオリジナル素材を発表したい」と長らく方法を探っていたところ、ついにシンプルで存在感のあるバングルを開発した。

鼈甲でアクセサリを作っていた初代の思いが、現代に蘇ったとも言える。

マルチバンド

丸進



紐への飽くなき“探究心”

素 材: ナイロン・ポリエステル
ポリウレタン
サイズ: Aタイプ(束ねる)/W36cm

繊維副資材と呼ばれる紐やリボン、レースなどの企画卸売業を営む丸進。1935年創業当時はアジア向けの輸出商品が中心だったが、近年は国内の商社に向けて商品提案を行っている。

しかし繊維副資材はあくまでも“脇役”。“主役”となる商品を作りたいというのが長年の夢だった。そこで開発したのが、



企画室 黒川僚

〒602-8205 京都市上京区中立売通松屋町東入る
Tel : 075-432-2131
Fax : 075-432-2138
Mail : t.nozawa@marushin-kyoto.co.jp
<http://www.marushin-kyoto.co.jp>

株式会社
丸 進



自社の定番商品を使ったマルチバンドだ。室の黒川僚は言う。

これは、反射素材のシルバー糸が織り込まれた伸縮性の高いテープ。元々、スポーツ用品や夜間向け商品として開発したものだったが、用途はほかにもあると踏んだ。

「新しいコンセプトを作ることはやりがいでもあり、難しさでもあった」と企画

試行錯誤の末、「束ねる」「挟む」「繋げる」の3つの機能に着目し、金具をベルト式、クリップ式、キーリング式の3種類に。ブックバンドやベビーカーのひざ掛け留めなど、具体的な使い方の提案をする一方で、使い手にも自由な使い方の余地を残す。

KESA バッグ

加地金欄



積み重ねた伝統技術を“一度壊す”

素 材：絹・綿・ポリエステル
サイズ：W40cm×D5cm×H80cm

1980年に北野天満宮の門前町に創業した加地金欄。寺社仏閣の装飾品や袈裟に使用する、金欄（きんらん）織物を製造している。

西陣織の真骨頂とも言える金欄織物の伝統技術を後世につないでいくため、寺社仏閣向け以外の需要開拓に大胆に挑んだ。開発したのは、一般市



織手 坂田雄介

〒602-0099 京都市上京区大宮通り西裏
芦山寺上る2丁目豎社南半町225番地
Tel：075-366-6126
Fax：075-366-6127
Mail：y.sakata@kajikinran.jp
<http://www.kajikinran.com>



KAJI KINRAN



場に向けた袈裟形バッグである。

これは袈裟の一種である絡子（らくす）をモチーフにした、肩から斜め掛けできるバッグだ。「かつて取引先の寺からも、絡子をバッグのように使いたいという要望があった」と織手の坂田雄介は言う。理にかなった用途に着目し、発展させた。「糸の配色に最も注力した」と坂田。

目指したのは、ハイクラスのカジュアルバッグである。既存の柄を生かしながらも、従来品によく使われる金糸を銀糸や銅糸に、茶や深緑系の糸を明るめの糸に替えて新しさを加えることで、新旧融合のデザインを完成させた。「バッグを通して金欄織物を身近に感じてほしい」と話す。

REMAKE デニム メッセンジャー

宇野商店



“いつでも変われる”可能性を秘めたもの

素 材: 綿・デニム

サイズ: W47cm×H30cm×D15cm

歌舞伎十八番の1つである「勧進帳」。この演目に登場する武蔵坊弁慶の衣装の一部に使われている格子模様を「弁慶格子」と言う。明治末期より歌舞伎や文楽などの舞台衣装を製作している宇野商店では、この弁慶格子を通して伝統芸能に興味を持ってもらおうと、数年前より一般市場に向けた商品



代表取締役 宇野滋記

〒603-8151 京都市北区小山下総町 42 番地
Tel : 075-451-3142
Fax : 075-431-6136
Mail : uno.shouten@gmail.com
<http://kanjincy.com>

Uno's



開発を行っている。

当初は衣装の残布を活用することを考えたと言うが、絹織物では耐久性が足りないため、丈夫な帆布に弁慶格子模様をプリントすることで、日用品なアイテムへの展開を可能にした。

その帆布を用いて、古着のデニムと組み合わせたカジュアルバッグを新たに

開発。表生地に古着のデニム、裏生地に弁慶格子模様の帆布というユニークなデザインだ。これは三代目の宇野滋記が「デニムが好き」だったために実現したデザインだが、まさに現代の“歌舞伎者”といった様相である。メッセンジャーバッグ、トートバッグ、クラッチの3アイテムを展開する。

楮

和紙来歩



絶えかけた技術を“再発見する”

素 材：楮和紙

サイズ：便箋 / W26cm×D18.5cm

封筒 / W10cm×D26cm

桐箱 / W30cm×D22.5cm×H4cm

親会社の加徳は、1922年より襖紙や障子紙、表具材料などを扱う卸販売会社だ。販売する商材を内装設計者や一般の生活者に気軽に見てもらおう場所として、2007年にショールームを開設し、インターネット通販を開始した。それが和紙来歩である。

「和紙の定義が揺らいでいる今改め



和紙プロデューサー 加藤富美代

〒601-8104 京都市南区上鳥羽角田町 52
Tel : 075-681-9123
Fax : 075-681-9125
Mail : info@washilife.com
http://washilife.com

京都 和紙来歩



て、国産の原料を使い、灰煮で作る手漉き和紙を提案したい」と意気込むのが、和紙来歩の和紙プロデューサー、加藤富美代である。

和紙の三大原料として知られている楮(こうぞ)、三桠(みつまた)、雁皮(がんび)の中でも、楮は日本全国どこにでも自生していた最も身近な原料だ。これに着

目し、高知県・土佐で採れる楮を用いて、福井県・越前の手漉き職人に抄紙を依頼。これを用い、封筒と便箋のレターセットを開発した。

楮は繊維が長く丈夫で、水にも溶けないため、100年先まで残ると言われている。そんな和紙に「手紙を書く文化を残したい」と加藤は思いを託す。

金欄緞子の封筒

鳥居



日常生活を“豊かにする”もの

素 材: シルク・和紙
サイズ: 定形封筒 / W20cm×H15cm

1872年に神佛金欄法衣商として創業。二代目が一般市場向けに表装用の金欄（きんらん）緞子（どんす）を考案し、卸販売を開始。現在も表装用の金欄緞子をはじめ、額装用の生地を幅広く取り扱っている。金欄とは金糸や金箔で文様を表した織物。緞子とは経糸の縐子織地に、緯糸で文様を表した絹織物で、



取締役 鳥居玲子

〒604-0804 京都市中京区夷川通堺町
東入網屋町128
Tel : 075-222-1031
Fax : 075-222-2350
Mail : torii-r@kyoto.eeyo.jp
<http://www.torii-kyoto.jp>



TORII



いずれも厚地で光沢があり、最高級の織物とされている。

この金欄緞子を用いて、近年、同社は日用雑貨の開発に取り組んでいる。金欄緞子に裏打ち加工を施して紙と一体化させることで、様々な商品への転用を可能にした。

新たに開発したのは、5アイテムの

封筒。ぽち袋、カード入れ、定型封筒、定型横長封筒、CD入れと、身近に使えるものを提案した。「招待状やお礼状などに、おもてなしの心を込めた、特別感のある封筒として使ってほしい」と取締役の鳥居玲子は言う。

外国人向けの手土産としても喜ばれるに違いない。

和-bako

尚雅堂



過去から続くものに“存在価値を与える”

素 材：和紙

サイズ：W24cm×D5cm×H32cm

色紙短冊や和本帖の卸販売会社として1964年に創業した尚雅堂。元々、短冊は和歌を、色紙は「書」を書くものとして発達。昭和時代には絵画を色紙に複製して床の間飾りとする文化が流行り、需要が大きく伸びた。

長年、問屋や小売店と取引してきた尚雅堂は、2003年頃から一般の生活



代表取締役 松尾安浩

〒616-8117 京都市右京区太秦門田町 4-1
Tel : 075-881-8488
Fax : 075-861-9321
Mail : info@shogado.co.jp
http://www.shogado.co.jp

尚 雅 堂



者が「日常的に使いたい」と思えるような商品開発に乗り出し、レターセットやぼち袋、朱印帖などを試行錯誤しながら企画し、販路を広げてきた。

二代目の松尾安浩は「デザイナーら専門家の視点を取り入れて、今までにない商品にトライしたい」と新たな境地を目指し、色和紙を張った縦型ファイ

ルボックスを開発した。これはオフィスの机に並べるだけでもインテリア性が高く、またドキュメントケースとして鞆に入れて持ち歩くことができるものだ。

色和紙には、部分的に唐紙を張って和をより感じさせるものとした。大事なプレゼン資料を入れるケースとして、会議室でも映える道具となりそうだ。

十二単縁起 プレースマット

弥栄



古きを用いて“潤いを与える”

素 材: ポリエステル 浮織物
サイズ: W50cm×H30cm

親会社の平安装苑は、1929年より神社調度品や神官装束を製造販売する会社だ。先代は、平安の御大典で宮中にて着装の奉仕をした実力者である。

その際、皇后様より「今後、ますます多くの皆様に十二単を伝えていってください」とのお言葉を頂き、その使命を共に果たすべく、先代から十二単の制



代表取締役社長 福呂一榮

〒604-8031 京都市中京区二条通高倉西入る
松屋町58番地
Tel: 075-255-1028
Fax: 075-231-2217
Mail: iyasaka@junihitoe.jp
<http://www.iyasaka-kyoto.co.jp>



作技術を教わってきたのが福呂一榮だ。先代亡き後は、十二単の婚礼貸衣装や、十二単の着装体験などの事業を精力的に展開し、2013年に十二単専門店の弥栄を設立した。

「十二単の文様や重ねの色目には、平安貴族の教養や感性、長寿や繁栄といった願いが込められている。1200

年間、脈々と引き継がれてきた伝統文化を社会に今、発信したい」と福呂。

この度、十二単の生地を用いたテーブルファブリックとベッドスローを開発した。十二単の色の重ねを表現するため、現代的なパッチワークと、衣紋道の山科流の装束仕立てを組み合わせた縫製を京都で行っている。

ガラス窓付蒔絵風 オーバーナイター

田中ケース



形を変えても“本質を変えない”

素 材：外装 / 金蒔人工皮革・ガラス
内装 / 人工スエード
サイズ：W27cm×D19cm×H5.5cm

高級品や趣味の道具は、それを収めるケースにも品格が求められる。「黒衣でありながら、商品の“顔”を作っているという自負がある」と言うのは、田中ケースの常務取締役、田中健志だ。

田中ケースは、元々、懐中時計や腕時計のケース製造会社として1923年に創業。戦後の高度経済成長期には、



常務取締役 田中健志

〒604-8074 京都市中京区富小路通六角
上る朝倉町 545
Tel : 075-241-1206
Fax : 075-256-1167
Mail : office@tanaka-case.co.jp
http://tanaka-case.co.jp



市場が大きく伸びた宝飾品や洋食器のギフトパッケージを製造し成長した。京都を拠点とする強みから、お香や仏具、塗物などのケースも得意とする。

これまで黒衣に徹してきたが、「自社技術を生かしてオリジナル商品を作りたい」との思いが強まり、オーバーナイターを開発した。これは夜から朝に掛けて、

時計や財布、眼鏡など身の周りの物を仕舞っておくためのケースだ。京都らしさを表現するため、蒔絵の装飾を採用。木箱に人工皮革を張り合わせ、螺鈿の加飾や金粉の散布を施す伝統技法を用いて、部分的に蒔絵を施した。

質の高い暮らしを望む男性に相応しい道具となりそうだ。

Soraphone ソラフォン

熊谷聡商店



“感動や喜び”を与えられるもの

素 材:磁器

サイズ: W19.5cm×D14.1cm×H6.5cm

加熱するスマホ市場の中で、メガフォンとほぼ同じ構造をしたスマホスピーカーが注目を浴びている。磁器などの硬い素材を利用し、反響する性質を生かして、電力を使わずに指向性の高い音を鳴らす音響機器のことだ。

京焼・清水焼の卸販売会社を営む熊谷聡商店はこれに着目し、新しい市場



代表取締役社長 熊谷隆慶

〒607-8322 京都市山科区川田清水焼団地町9-5
Tel : 075-501-8083
Fax : 075-501-5876
Mail : takayoshi@kyoto-kumagai.co.jp
<http://www.kyoto-kumagai.co.jp>
<http://kplus.kyoto-kumagai.co.jp>



に向けた商品開発に挑んだ。「国内市場に出回る磁器製スピーカーをリサーチしたところ、伸び代はまだあると踏んだ。焼物の魅力を生かしたインテリア性の高いスピーカーを作りたいと考えた」と、三代目の熊谷隆慶は言う。

1935年に創業した熊谷聡商店は、先代より自社商品の開発に乗り出し、現在は

100社近くの窯元や絵付師との取引により、茶器や食器、仏具などの自社商品を企画販売している。

この度、手を組んだ窯元の陶葺は、表面にまばらな光沢を持つ「花結晶」という結晶釉の技法を得意とする。これを用いて、磁器特有の美しさを備えたスピーカーを完成させた。

西陣のうつわ

江村商店



“破壊と創造”の連続

素 材：ガラス・人工樹脂・
ポリエステル・ナイロン
サイズ：W13cm×D28cm～

西陣織がガラス皿に変身するとは、誰が想像しただろうか。これを開発した江村商店は、1918年より呉服問屋を営む老舗の1つだ。西陣織や京友禅をはじめ、大島紬、結城紬など、日本全国から選りすぐりの反物を仕入れ、小売店へと卸している。かつては特殊な織り方で模様を表現した白生地を丹後地方で開発し、



専務取締役 江村和博

〒600-8446 京都市下京区高辻通新町
西入る堀之内町282
Tel：075-341-5291
Fax：075-351-3737
Mail：kimono@emura-shouten.com
<http://www.emura-shouten.com>



ヒットを飛ばした。

「この優れた職人技術をほかのアイテムへ転用できないだろうか」と、専務取締役の江村和博は数年前から考えるようになる。こうして取り組み始めたのが、ガラス皿の開発だ。

これは建築資材の技術を応用した合わせガラスである。小紋柄の西陣織

をガラスとEVA樹脂で挟み込んだ。表面は艶やかな透明ガラス、裏面は樹脂加工が施された西陣織という作りで、表面からは織り目の質感までもが透けて見える。裏面の樹脂には滑り止めとガラスの飛散防止効果がある。

雅な京都らしさを備えた、まったく新しいガラス皿の誕生である。

漆まめさら 京のお道具シリーズ

井助商店



新しい用途を“掘り起こす”

素 材: セン・漆塗り
サイズ: φ10cm×H1cm

文政年間に漆の精製販売店として創業した井助商店。漆器産地とのネットワークと京都の地の利を生かし、五代目からは漆器の開発も開始。生活者のニーズをとらえ、漆器のデザインに生かすモノ作りを続けてきた。

七代目の沖野俊之は、数年前から輸出事業へも力を入れ始めた。そこで初めて取



代表取締役 沖野俊之

〒600-8066 京都市下京区柳馬場通五条
上る柏屋町344
Tel : 075-361-5281
Fax : 075-361-5285
Mail : shikki@isuke.co.jp
http://www.isuke.co.jp

 isuke



り組んだデザイナーとのコラボレーションに手応えを感じ、国内市場に向けた商品開発にも改めて挑戦する。

開発したのは「日常生活の中で手軽に使ってほしい」という思いから生まれた、漆器の豆皿である。漆器の皿は小さくても五寸までが多く、三寸大の豆皿はあまり見かけない。その目新しさも然りだ

が、黒、赤、オレンジ、黄、モスグリーン、青と、色とりどりの皿であるのも特徴だ。木目を見せる「目弾き」という技法で彩色している。

さらに京都らしさを表現するため、京の道具をテーマにした絵と、芸艸堂の木版画の絵を載せた。中村芳中の代表作「仔犬」の絵も豆皿に登場する。

Pelican Teapot

晋六



作り手と使い手が“共に生み出す”もの

素 材: 陶器

サイズ: W15.4cm×D8.8cm×H8.4cm

1932年、京都・山科地区に築窯した晋六。初代の妻の実家が料亭を営んでいたことから、主に「割烹食器」を焼いてきた。当時、茶葉販売店の依頼で開発したのがペリカン急須だ。

京都の料亭では食前に煎茶を飲み、食後に番茶を飲む習慣がある。京都で作られる番茶は、茶葉がとりわけ大きい。



代表取締役 京谷美香

〒606-0015 京都市左京区岩倉幡枝町322番地
Tel : 075-721-3770
Fax : 075-721-6237
Mail : kyoto@shinroku.com
<http://www.kyoyaki.net>



そのため急須の注ぎ口に張り付いた茶葉が穴をふさぎやすく、お茶の出が悪くなることがある。

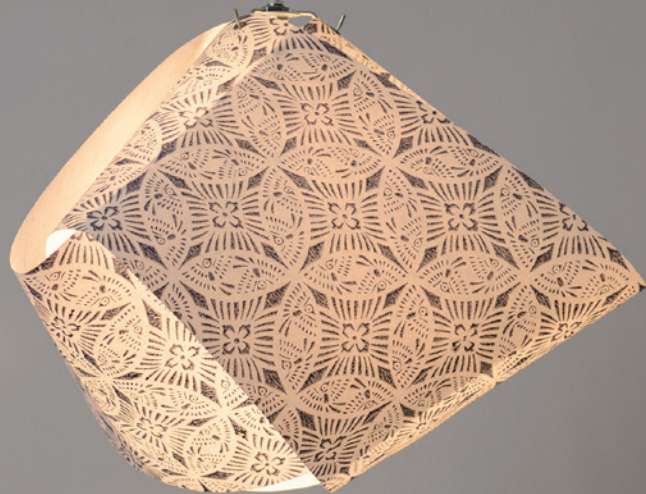
それを改善するため、晋六では急須の注ぎ口を広げ、穴の数を増やした。その数、なんと200個近く。注ぎ口が大きく飛び出した急須は愛嬌たっぷり、まるでペリカンの口のように映った

ことから、この名が付いた。

長く愛されてきたペリカン急須を「若い世代にも使ってほしい」という思いから、リ・デザインに挑戦。腰や取手を角張った形に変え、ターコイズブルーやグリーンなどの釉薬で柔らかに彩色した。1~2人用サイズなので、一人暮らし世帯にもちょうどいい。

KARA-IRO からいろ (唐彩)

丸二



“伝統を守り通す”ことで生まれる価値

素 材：塩化ビニール樹脂・和紙

・水性顔料・金具

サイズ：ペンダント / W44cm×D38cm

×H32cm

コード / W50cm

初代は明治末期から昭和初期にかけて表具師として活躍。二代目より、表具や襖紙など和室内装材の販売会社へと転身した丸二。その内装材の1つが自社で製作する唐紙だ。

京都で作られる「京唐紙」は、版木を使い、雲母（うんも）や胡粉（ごふん）などの顔料で伝統文様を描くのが基



代表取締役 西村和紀

〒600-8076 京都市下京区高辻通堺町
東入る泉正寺町 462
Tel : 075-361-1321
Fax : 075-361-8876
Mail : kaznis@maruni-kyoto.co.jp
<http://www.maruni-kyoto.co.jp>

京からかみ 



本。唐紙を広く知ってもらうきっかけとして、丸二は唐紙のアートパネルや、版木スタンプなどを開発してきた。

さらに唐紙の魅力を伝えるため、照明器具を新たに開発。「唐紙の風合いを損なわないデザインの検討に苦労した」と代表の西村和紀は言う。試行錯誤の末、1枚を交互に重ねて巻いた形のペンダント

が完成した。芯材に樹脂フィルムを挟み込み、破れない工夫も施した。

世の中に和紙の照明器具は多くあるが、唐紙は灯りを点けていない時でも、その文様を楽しめるのが特長。灯りを点ければ、文様がふわっと浮かび上がる様子も楽しめる。趣向性の高いインテリアを求める人におすすめだ。

EBISUGAWA

宮崎木材工業



“ルーツを大事に” 品質で勝負する

素 材: サクラ
サイズ: W52.4cm×D55.5cm
×H60.7cm

1856年(安政3年)に初代が指物師として独立して以来、京指物の技術を生かして家具や船舶内装、建築内装と事業を広げてきた老舗の宮崎木材工業。

京指物は雅な宮廷文化の下に発達した技術のため、華奢で繊細な造りを特徴とする。その伝統技術を生かして、1936年に開発したオリジナル家具が



代表取締役 宮崎真里子

〒604-0804 京都市中京区夷川通堺町
西入る絹屋町129番地
Tel: 075-935-8106
Fax: 075-935-8103
Mail: kikaku@miyazaki-mokuzai.com
<http://www.miyazaki-mokuzai.com>



MIYAZAKI



「畳椅子」である。

これは建築家の藤井厚二が、本店の応接間を設計した際に併せて設計した椅子だ。座面に畳が敷かれ、和室の設えに合う佇まいをしている。

同社の看板とも言えるこの椅子を現代の暮らしにも提案したいという思いから、現代版・畳椅子「EBISUGAWA」を新

たに開発した。2.6ミリ角の細いサクラ材で、脚、肘掛け、背もたれ、貫を組んだデザインで、金物の釘は一切使わず、指物の技術で接合している。

「指物は使うほど接合部が強固になるのが特長」と代表の宮崎真理子は言う。和洋どちらの空間にも映える、オリジナリティの高い椅子が生まれた。

京都四神苑部

土田人形



“マイナーチェンジとフルモデルチェンジ”

素 材：陶器

サイズ：人形 / W7cmxD5cmxH10.7cm

使い魔 / W3.1cmxD2.8cm

xH4.2cm

京都の伝統工芸の1つに素焼で作る人形「京陶人形」がある。土を成形し、焼成したものに顔料で彩色し、顔を描き入れた人形で、節句や干支などの置物、土鈴、根付が定番商品である。

土田人形の創業は1944年。初代は彩色職人で、二代目より自社での工程を徐々に広げていき、現在は企画から原型



代表取締役 土田博之

〒615-0915 京都市右京区梅津南町1番地10
Tel : 075-871-6834
Fax : 075-871-6845
Mail : tutida@maia.eonet.ne.jp
<http://www.tutida-ningyo.com>

土田人形



製作、型取り、素地製作、焼成、彩色、面相、箱詰まで、自社ですべて一貫生産を行っている。

これまでも京焼アロマ根付などの新商品開発を積極的に行ってきた土田人形だが、「まったく違う分野に挑戦したい」とさらなる可能性を探る。

そこで漫画家の卵と手を組み、漫画に

登場するキャラクター人形の製作に挑んだ。それは京都の街を舞台にした物語で、四神を守る4人のキャラクターが登場する。「京陶人形を作る際の基本をいったん無視し、頭を真っ白にして取り組んだ。苦労はあったが、新しい発見もあった」と代表の土田博之は確かな手応えをつかんでいる。



あたらしきもの京都

<http://www.atarashiki-mono-kyoto.com>

ファッション京都推進協議会（出展）/ 京都府（商品開発）

事務局：京都商工会議所 産業振興部

〒604-0862 京都市中京区烏丸通夷川上ル

TEL 075-212-6450 FAX 075-255-0428

MAIL shinkou@kyo.or.jp